住んで楽しい別府中心市街地

文学部人間関係学科
篠　藤　明　徳（編）

１月11日、別府市営竹瓦温泉の２階で昨年度に引き続き、第３回「学生とまちづくり・シンポジウム」が開催された。今年度のテーマは「住んで楽しい中心市街地」。市議会議員やまちづくり活動で活躍する多くの市民も参加し、活発な議論が行われた。

このシンポジウムは、人間関係学科１年生を対象にした「地域社会学」の一環として行われたものである。別府の中心市街地活性化について１年間、調査・研究したものを学生が発表し、参加者全員で討論しようとするもので、今年度発表のテーマは以下の４つであった。

１、住んでいる人々にとっての中心市街地
　－中心市街地に住む100人の住民アンケートを実施。居住者から見た市街地の課題と魅力を分析

２、福祉の視点から南地区を考える
　－南地区の自治会長や地域の医療関係者に取材し、高齢者福祉から見た南地区を分析

３、まちづくり運動としての「竹瓦倶楽部」
　－まちおこしグループ「竹瓦倶楽部」の活動に参加し、また、その中心的メンバーに取材し、その意味を考えた。

４、市議会議員から見た中心市街地活性化
　－市民の代表である市議会議員に学生が直接インタビューし、その回答を分析

当日、ＮＨＫや地元新聞の取材もあり、会場ははじめから熱気に満ちていた。発表は主にパワーポイントを使ったプレゼンテーションで、分かりやすい説明だったと参加者に好評であった。１年生ということもあり、調査内容は、学問的に見れば全くおぼつかないものであったが、地域社会に出かけての体験を重視することに主眼が置かれたものである。しかし、学生が足を使って収集した内容であったため、今後の中心市街地を考える上で参考になったとの意見も多い。はじめの２つの発表では、今後急速に進む高齢化に対して、福祉の視点からのまちづくりを早急に行う必要があると発表された。後者の２つでは、市民と議会・行政との意見交換や協働が大切ではないかと、調査した学生の率直な声が目立った。以下、学生がまとめた発表とその後行われた討論会の概要を報告する。

Ⅰ　住民100人から見た中心市街地

［担当学生］
浅野徹治、川岡充典、川上賢治、小曾根賢三、田頭太行、春木芳文、河野亘治、姜道明、朴相玟

１、中心市街地８町内の住民100人にアンケート調査

私たちは、「住民の視点から見た別府市中心市街地」というコンセプトで、住民対象のアンケー

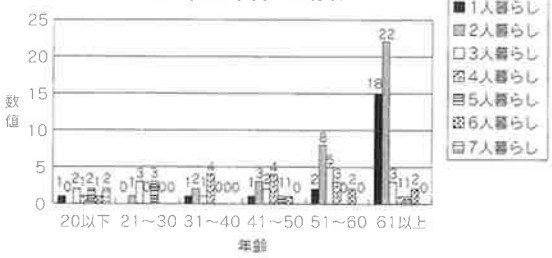
ト調査を実施した。アンケートの対象地域は、北浜、元町、駅前町、中央町、秋葉町、末広町、楠町、千代町の８つの町内で、その地域に住む100人の住民に戸別訪問し、聞き取り調査を行った。アンケートをとった人数が100人ということで、多少は偏った結果が出ているかもしれないが、住民意識の概要は把握できると考えた。住民の視点からみた中心市街地を調べたきっかけは、これまで中心市街地の活性化というと、商店街（別府の場合は、それに加えて飲食街や宿泊業も含む）の活性化に重点が置かれ、居住者にとっての地域の活性化が軽視されているのではと考えたためである。

アンケートの内容は以下の通り。

①性別、②年齢、③家族構成、④居住年数、⑤お風呂は自宅か共同温泉か、⑥自宅に温泉があるか、⑦日常の買い物は（トキハ、マルショク、ダイエー、コンビニ、その他）、⑧中心市街地の活動について知っていますか（路地裏散歩、路地裏文化祭など）、⑨その活動に参加していますか、⑩住み易さ、⑪住み易い理由、⑫住み難い理由、⑬海岸整備事業を知っていますか、⑭その賛否、⑮引越しを考えているか、⑯その理由、⑰今後どのようなサービスがあれば便利か(お弁当の配達、託児保育、家事サービス、高齢者・障害者の雇用機会など)

２、高齢化の進む中心市街地

年齢別居住人数



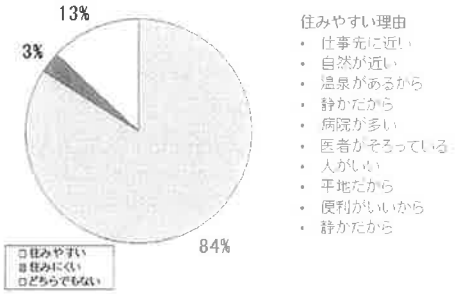
住民の年齢層は、大分市全体と比べて見ると、別府中心市街地の51歳以上の人口が２倍になっている。つまり、別府中心市街地では高齢化が非常に進み、若年者は大変少ない。また図１の示すように、61歳以上で１人暮らしが15人、２人暮らしが22人と圧倒的に多い。このことから今後、独居老人や老々介護の問題が深刻化することが予想される。年齢別居住年数を見ると、高齢者では41年以上と長く住んでいる人が多い。逆に、若年者は10年以下と21～30年が多く、後者の場合は、ここで生まれ育った人が多いようだ。

３、住み易い中心市街地

次に、中心市街地の活性化活動への参加状況であるが、活性化活動を知っている人は79％いたが、活動に参加している人はほとんどいない。しかしその中でも、特に若年者は活動について関心がない。まちづくりを考える時、地域の若者の参加が大切であり、今後の課題と考えられる。

図２が示すように、中心市街地が住みやすいと答えた人は全体の84％を占めている。その理由は、仕事先が近い、自然が身近、温泉、病院が多い、平地、便利と様々である。長年住み慣れている高齢者の人がそのように答えていた。そのため、引越しを考えている人はわずか13人で、87人の人は今の住居に住み続けることを希望している。このことは、しかし、前項で指摘した今後の独居老人等の問題にも直結していく。

中心市街地の住みやすさ（図２）



４、中心市街地に必要なサービスは？

質問項目17は、中心市街地住民の人が、どのようなサービスがあれば便利かを調べたもので、今後、地域商業等の活性化に何が必要かを念頭において立てたものである。しかし、結果は漠然としたものになった。高齢者はすべてのサービスを必要としており、若年層の人は、託児や保育関係のサービスを希望している人が多くいた。また、自由記述では、一番多かった意見としては福祉施設を増やして欲しい、福祉施設を安く利用したいというものだった。他に福祉に関するものとしては障害者と共存していける社会になってほしいとい

う意見もあった。もっと細かな地域住民のニーズの把握は、今後の課題である。

5、私たちの結論－「中心市街地福祉タウン建設」

中心市街地が高齢社会だということは調査により分かった。そして、10年後の中心市街地は、さらに高齢化が進んでいると考えた。その打開策として、私たちは、「別府市中心市街地福祉タウン計画」を考えるべきだとの結論に達した。51歳以上の住民のうち、中心市街地は住みやすいと答えた方の割合は実に98%だった。であれば、今後住み続ける高齢者にふさわしいタウンづくりが必要なのではないだろうか。また、医療機関も多く、温泉も豊かな中心市街地は福祉タウンにはもってこいだという意見もグループの中では多かった。福祉施設をもっと充実し、高齢者向けの町になり、そうなると、福祉関係の仕事が増える。それに伴い、介護福祉士、社会福祉士など福祉に従事したい若者の就業の場ともなり、多くの若者にとっても魅力ある地域になるのではないか。若者と高齢者が共生するまちとして活性化するのではと私たちは考えている。

II 福祉の視点から見た南地区

［担当学生］
植木裕香、笠木洋寿、桑原大、白春子

1、自治会長に聞き取り調査

私たちのグループは、「福祉の視点から見た南地区」というテーマで調査した。しかし、「福祉」といっても「障害者福祉」、「児童福祉」など様々なものがあるので、本調査では、高齢化の進展という社会状況に注目し、特に「高齢者福祉」の視点から調べてみた。

まず、最初に、南地区の中で自治会の会長を訪問し、次の質問をしてみた。

①自治会における高齢者の割合はどのようになっているか。また、高齢化の進行具合はどうか。
②老人活動など、高齢者に対する活動について。
③自治会から見た南地区の高齢者に対する生活環境は？　また、改善すべき点は。
④福祉施設などを建設すると仮定した場合、自治会としての意見は。

2、高齢化の進展と生活環境

どの自治会でも高齢化は進んでおり、高齢化率30%を超えるところが殆どであった。秋葉町の場合、町内約400世帯、町民740人の中で、65歳以上の住民は231人、高齢化率31%であった。

次に、各自治会で行っている老人会活動を見てみると、敬老の日に敬老会などの昼食会を催したり、独居老人に昼食配布をしたりしている。また、昨年11月には、南地区合同でグランドゴルフ大会を開催、200人以上の参加があったという。他に、演芸会、日帰り旅行なども行っている。

南地区は、かつて別府の中心であったということで、道路事情もよく、商店も多く、大型のショッピングセンターもあり、生活環境は整っている。また、医療機関も多く、高齢者が住むには住み易い環境である。しかし、問題点としては、集会場や公園等、多くの人が集まることができるところが少ない。

福祉施設の建設について、自治会としてまとまった考えがあるわけではないが、基本的には支持する声が多いようだ。

3、南小学校跡地の利用

南地区を考える上で、南小学校跡地の利用は大きな課題のようであった。取材で出てきた案を挙げると、

① 空校舎を利用し、福祉施設を作る。この場合、空校舎利用として、建設費用の節約になること、また、グランドなどを利用し、住民が利用できる広いスペースができるなどの利点が考えられる。しかし、街中であるため、他の福祉施設と異なり騒音等の問題も検討する必要がある。

② 校舎を取り壊し、マンションなどの住宅を建設する。立地条件が良いので、人口増加が

期待される。しかし、取り壊しから建設までの費用、若年層の入居者が見込めるかなどが課題である。

どちらにせよ、南小学校跡地利用は、今後の南地区の発展のキーを握っているといえるだろう。

４、医療関係者から見た南地区

高齢者福祉を考える上で、地域に密着している医療関係者の意見を聞こうと、浜脇記念病院院長の田代先生と渡部内科循環器科クリニックの渡部先生を取材した。質問事項は以下の通り。

①病院を利用する高齢者の割合

②病院から見た南地区の高齢者の生活環境、及びその改善点

③福祉施設について

病院利用者の約半数が高齢者であるという。また、南地区には病院が２つ、医院、診療所はたくさんあり、医療面では充実している。また、別府の他の地域と比べ、土地全体が平坦で、高齢者が居住するには適している。福祉施設では、市全体の制約から老人保健施設や特別養護老人ホームなどの建設は難しいかもしれないが、グループホームなどを設立することは検討すべきではとの意見があった。南小学校跡地利用のひとつとして、市による多目的レクレーションセンターの建設が有効ではないかという提案もあった。

５、私たちの結論－関係者がもっと交流し、協力することが大切

以上の聞き取り調査を通して、自治会、病院、市役所それぞれが南地区の課題に取り組み、考えてきたことを知った。しかし、それぞれがバラバラで相互の交流や意見交換が不十分なのではないかという思いも強く持った。南地区は今後高齢化が急速に進展することが予測されるが、今こそ関係諸機関、住民は意見交流を活発にし、その対策を講じなければならないのではないか。

Ⅲ まちづくり運動としての「竹瓦倶楽部」

[担当学生]
古賀俊雄、児屋野顕、長野優亮、洲戸拓郎

今回、竹瓦倶楽部について、４人の代表者の中から主に野上泰生さんと平野芳弘さんに取材し、それについての私たちの考えをまとめたことを報告したい。

１、竹瓦倶楽部とは

竹瓦倶楽部は、平野さん、栗田さん、河村さん、野上さんの４人の代表者と約400人の会員から構成されている。その中で、20～30人の人たちが積極的に活動に参加している。会員の勧誘は自然体で、各個人がその活動に興味があるなら参加できる。活動に参加しているほとんどの人は別に職を持ち、そのかたわらで倶楽部の活動に参加している。この事から、竹瓦倶楽部は強制力が無く、自由な団体であるということがわかる。

２、イベントの意味と目的

イベントを行う場合、竹瓦倶楽部は参加人数にこだわらない。つまり、参加人数の多い・少ないよりもそのイベントを通して情報発信をし、多くの人々に別府を知ってもらうことを重要視している。多くの人たちに知ってもらうためにイベントの量を増やすことはある程度必要である。また他の地域に住んでいる人たちに別府の隠れた魅力や別府ならではの魅力を知ってもらう上で、興味を引くようなイベントづくりをこれからもいっそう考えて行くべきである。竹瓦倶楽部から見たイベントのもうひとつの目的は、アクティブな人間を一人でも増やすことだ。イベントは人づくりのきっかけとなる場であるから、アクティブな人間＝まちづくりを積極的にしてくれるような人間を一人でも増やすことは、それによって人の心の関係に厚みを持たせる。竹瓦倶楽部は「浴衣deピンポン」「浴衣deサッカー」「路地裏散歩」等を活発に行っている。人づくりの意味からも、竹瓦倶楽部はこれからもイベントを多く実施していくべきである。

３、竹瓦倶楽部の情報発信

今まで、全国に住んでいる人たちは、竹瓦倶楽部という存在自体知らない、あるいは、知ろうとしてもなかなか手段がなかった。しかし、最近の竹瓦倶楽部の活動は、新聞・テレビ等でよく紹介されている。近年インターネットが普及し、誰でも簡単に情報を引き出せるようになった。そこで竹瓦倶楽部のホームページや八湯メーリングリス

トの存在は、その情報発信に大いにプラスになっていると感じる。なぜならこのホームページがあるおかげで、実際竹瓦倶楽部がどのようなものかということが知りやすくなったからである。また、そのページにあるリンクから別府の様々な情報を知ることも出来る。こうして、竹瓦倶楽部および別府に興味のある人を着実に増やしていっているのではないだろうか。そしてその情報発信の成果が認められ、昨年の「地域作り総務大臣表彰」、「大分県1村1品運動努力賞」の受賞に繋がったのであろう。今後の情報発信として、こまめにホームページを更新するなどして別府の最新の出来事を知ることが出来るようにするべきである。

情報発信の成果

4、まちづくりで大切なこと

竹瓦倶楽部はこれまでまちづくりを進めてきた。だが、まだ発足して数年であり、数値的に表せる成果はまだ少ないという。しかし、昔と比べて別府のまちづくりに関心をもちつつある別府の住民が増えているのは事実らしい。竹瓦倶楽部はまだ途中段階であり、これから数値的実績は確かなものになるだろう。

竹瓦倶楽部から見て、まちづくりをする上で重要なことは、まずそこに住んでいる人たちの視点で考えるということだ。そこに住んでいる人たちが、住みやすい町になったと思う事が大事だ。そして他の地域に住んでいる人たちが、この土地に住んでみたい、又は、一度行って見たいと思うような町になることがまちづくりの成功だと考えている。一般的にはまちづくりの内容は千差万別である。だから、竹瓦倶楽部が現在行っているように、様々な人たちが充分にお互いの意見を述べ、討論しあうことでまちづくりに対する共通認識を持ち、それによって別府の町の良い方向性を共に求めていくことが成功につながるのではないかと私たちは考える。

東京都にある「谷中」は、古くから多くの寺が建っている「寺町」として発展した町である。ここは、東京都の住んでみたい町アンケートで1位になり、今東京で最も注目されている町のひとつである。なぜなら、谷中は庶民的な雰囲気がある町だ。町の中には地元の人が親しんでいる複数の店や路地裏があり、下町という雰囲気があるからだ。そういった意味では、別府と谷中はとてもよく似ていると私たちは思う。また他の町からくる人たちも、暖かく迎えてくれるような独特の雰囲気があるように感じる。谷中には独特な親しみやすさがある。このような場所は散歩やカップルのデートコースやお花見等に使われているらしい。つまり、その店や場所の本来の機能以外の理由でも人が気軽に足を運べ、人情味のある町、これが谷中なのである。これからの別府のまちづくりを行う上で、大変参考になる町のひとつだ。

5、人のネットワークづくりとその課題

竹瓦倶楽部が出来る前は、今の「タケヤ」「サロン岸」のような店もなく、別府の魅力をアピールする場と機会がなかったらしい。しかし、竹瓦倶楽部ができ、様々な活動が行われ、少しずつ別府の本当の魅力が理解されて来ているという。人と人とのネットワーク・まちづくりのネットワークを良くしていくためのムードが良くなってきている。私たちは、それは別府を愛している人が増えてきているからだと思う。

竹瓦倶楽部の活動について感じたことは、別府の人達が全員竹瓦倶楽部の活動に参加しているわけではないということだ。実際、仕事が忙しすぎてなかなか参加できない人もいるだろう。しかし一番の理由は、自分たちの町に対する興味が薄いからではないだろうか。例えばマンションに住んでいる人たちは、他の地域から移り住んだ人も少なくなく、別府に来た理由も、仕事上の理由や生活上の理由の人がほとんどだ。もし興味が薄いのならば、かりにイベントがある時に暇であったとしても、参加しようという気持ちが起きにくいだろう。また、高齢者が参加できるイベントが少ないために参加しにくいのかもしれない。これは重

要な課題の一つだと考える。そこで提案したいのは、たとえ高齢の人たちや多忙な人たち、よそから来た人たちであっても、気軽に交流を図れるようなイベントも増やしていくべきだ。例えば百人一首大会などであれば、子どもから高齢者まで参加できるし、カラオケ大会なども面白いと考える。もちろん別府の今の良さをそこなわないイベントにすることが大事である。その中で竹瓦倶楽部のイベントの意味と目的と竹瓦倶楽部の活動の意味を分かってもらう事が大切だ。

６、竹瓦倶楽部の今後の発展のために

今後、竹瓦倶楽部の活動量と範囲・種類は広がっていく。それに伴い、動くお金の量も多くなる。お金の管理はしっかりしていかなければならないと竹瓦倶楽部の人々は考えている。しかし、私たちが大切だと感じることは、竹瓦倶楽部の本来のスタイルである、 自由で気軽な団体という性格は残したまま、きちんとする所はしっかり管理しなければならないということだ。竹瓦倶楽部の今後は、決してその活動が本来の目的を誤ったり、途切れたり、弱まってしまう事のないようにするべきだと考える。

現在、竹瓦倶楽部は、地元の子どもたちを対象に「別府の子どもガイド」を育てている。これは全国で放送され、話題を呼んだそうだ。竹瓦倶楽部がこの子どもたちに思う願いとは、自分の町に誇りをもって、自分の町を好きになって欲しいということだ。そして、別府の良いところや悪いところを知って、自分なりの判断力を養って欲しいと願っている。別府をよくしていく人間に将来育ってくれたら、とてもうれしいことだと竹瓦倶楽部の人々は考えている。

７、別府復活のきっかけ・竹瓦倶楽部

竹瓦倶楽部を調査して感じたことは、積極的に活動している人たちと４人の代表が別府を愛しているということだ。寂れていく別府を何とかしたいという気持ちがある人が、別府にこんなにいたという事は素晴らしい。竹瓦倶楽部は別府を住みやすい町・魅力のある町にするためのきっかけとなる組織ではないだろうか。将来的には竹瓦倶楽部からもっと様々な組織が出来て、それぞれの人たちが自分たちで楽しみながら企画を進めていけるようになれば、竹瓦倶楽部のやってきた事の意味がもっと増すことになる。まずは、別府に住んでいて別府に関心が無かった人たちは、今の別府をもっと良くするために何とかしようと思うことから始めるべきだ。そして竹瓦倶楽部の人たちと一緒になって楽しくまちづくりをすれば、例え、どんな小さなイベントをやり終えた後でも、きっと達成感をみんなで感じることが出来る。竹瓦倶楽部のこれからの活躍、そして別府がもっといい町になることを期待したい。

Ⅳ 市議会議員の考える中心市街地活性化

[担当学生]
黄成子、井本彩、内海芳、梅原麻衣子、
岡部美和子、小田映美、小林悦子、杉本有希、
武宮陽子、藤内沙耶香、橋本麻衣、別當藍、
宮崎聖史、高橋友昭、劉淳南

１、住民代表である議員は何を考えているのか

私たちは、様々な竹瓦倶楽部主催のイベントやまちづくりに参加し、この街の歴史や商店街の実情、この街が抱える問題を知った。また、それを解決しようと頑張っている人たちにも出会った。そこで「行政は何もしてくれない」という声をしばしば耳にしたが、どうしてだろうという疑問を持った。後期は、自分たちで調査・研究することになったが、中心市街地の活性化も市全体の政策の中で取り組まれるべきだと考えると、「市政における中心市街地活性化の意味」を住民の代表である市議会議員に取材することで調査・研究しようということになった。

以下の質問項目を事前に議員に送付し、基本的には２人の学生が取材に伺うことにした。一組あたり４、５人の議員に会ったことになる。現在市議会議員は32名であるが、２名の議員は期間中都合がつかず、結局30名の議員から回答が得られた。以下、質問事項とそれに対する議員からの回答で主だったものを紹介したい。

２、質問事項

①中心市街地の問題についてどのようにお考えですか。

②中心市街地活性化に必要なものは何でしょう

か。

③中心市街地活性化の為に行政がするべきこと（出来ること）は何でしょうか。

④近鉄跡地の今後の利用についてお聞かせ下さい。

⑤楠港跡地の今後の利用についてお聞かせ下さい。

⑥その他中心市街地に関することで何かあればお聞かせ下さい。

3、議員からの主な回答

①の質問に対する回答

・無駄な都市化（田舎と都会の間）が進んでいる

・若い人たちが県外に出て行き（別府は就職が無いため）若い経営者がいないこと

・ホテル内でのお土産の販売が商店街衰退の原因

・交通の便も悪い、駐車場が無いこと（不足）

・パチンコ店が多い

②の質問に対する回答

・アーケード街に観光客の動員が望めないとき、商店以外の活用も検討すること

・温泉を利用したまちづくりに加えて、高齢化・国際化に向けたまちづくりを

・高齢者のための中心市街地に施設などセンター開発が必要

・屋台など食文化について工夫すること

・イベントを催す

③の質問に対する回答

・補助・支援をすること（祭りやイベントの補助）

・中心市街地活性化事業に対する別府市の基本計画を出来るところから、関係者の同意を得ながら確実に実施すること

・市民の意見を集める機関をつくって市民の意見を反映すること

・温泉が枯れないように、海が汚れないように、下水の整備や自然保護施策強化

④の質問に対する回答

・バスターミナルの建設

・別府市が買収し、無料駐車場を

・観光公園を設置し、駅前の憩いの場として市民などに利用されれば

・市民が集まる複合施設としてショッピングセンターなどを作る

・屋台街をつくること、駅の近くなので、地元の仕事帰りの人たちも利用できる

・子供から大人まで楽しめるような、感動を与えるようなもの

⑤の質問に対する回答

・カジノ建設（反対意見も多かった）

・場外馬券売り場（人が集まればいい）

・駐車場

・観光目的にしたイベント会場（海に関係したもの）

・北浜旅館街移転

・海岸散策・公園・ショッピング・世界一のジェットコースターがある遊園地

・温泉の熱を活かした植物園（フラワーガーデン）

・トイレや休憩所などが少ないので、それらがある複合施設

・世界一の大型温泉・競走馬の治療場

・大人から子どもまで利用できるレクレーションセンター・スポーツセンター

・名前が知られていると、旅館組合も反対しないので、名の知れた一流ホテルを建てる

⑥の質問に対する回答

前記項目と重なる回答が多かったため、前記回答の中に統合。

4、取材を終えて

議員取材ということで、はじめはかなり緊張した気持ちをグループの学生は持った。しかし、終わってみると、大半の学生が、議員に対して熱意を持ったとても魅力的な人たちであると感じていた。（反面、やはりやる気が無いのではないかと

の感想を持った学生もいた）篠藤教授が「議員は一般住民相手に話すのが商売だから、きっとよく話すよ」と言っていたことを思い出す。どちらにせよいい経験であった。

ただ、こうした議員の熱意が何故、結果（市民の声の反映）に繋がらないのだろうか。議員の中に「市民のやる気の無さ」を問題にする人が結構いたことも気にかかる。まちづくりを熱心にしている市民からは逆の声も聞かれる。こうした市民と議員の隔たりは一体どうして起こるのだろうかという疑問を率直に感じた。隔たりを無くすのに、議員の側からアプローチは出来ないだろうか。何か方法は無いだろうか？「市民の声を拾う機関を作る」「学生と交流を深めたい」「八湯トラスト運動など、市民も単に要求するだけではなくなっている」などの意見も出た。今後、中心市街地の問題だけではなく、いろいろな課題について、市民とその代表である議員の活発な交流が望まれている。

Ⅴ 討論会

以上４つの学生発表の後、会場の参加者全員で活発な討論が行われた。昨年同様、結論を求めての討論ではなく、課題を明確にして今後の合意形成のスタート台を作るという狙いで行われたものである。

議論の組立てとして、司会者である篠藤教授から以下の3点につき指摘があった。

① 今回の発表では、まず、中心市街地に住んでいる人々にとって魅力的なまちづくりが大切であり、その中でも、南地区では今後、高齢者を中心とした福祉タウンの建設を目指すべきであるとの考えが出されたが、それについてどう思うか。

② 活性化というとき、最近、カジノの議論が出ているが、それについてどう考えるか。

③ 最後に、議員と住民、或いはいろいろな団体のコミュニケーションをより図るためには何が必要か。

１、住んで楽しい市街地

中心市街地で最近進んでいるマンション建設について、定住を進める点で効果的という声がある反面、海、山を望める別府の景観を壊すと否定的意見が出た。一般参加者から、学生は市街地に住みたいか聞きたいという質問があり、4名の学生が答えたが、韓国からの学生を除き、住みたくないと否定的答えであった。その応えは以下の通り。こうした本音には、参加した別府市民の多くが考えさせられたようだ。

①住みたくない→　福岡と比較すると、中途半端である。レトロな町並みと高層住宅が立ち並んでいる。この中途半端さをどうにかしないと住みたくなくなる。

②住みたくない→　山口もさびれている。地域の文化がなんなのか？自分が文化を知り深めて地域に定着すればよいのだろうが、今はまだ住みたくない。

③住みたい→　別府は発展しなくてよい。別府は田舎であり、そういうのがあっていい。別府に住んでいるから、大分に買い物に行って楽しい。別府は別府らしさがあり、人の情があふれている。別府はそれでいい。都会だったら、東京には負ける。

④住みたくない→　娯楽施設があるところに住みたい。大分の町でさえ町じゃない。別府は田舎だなーと思う。

それでも、市民からは、流行を追いかけるだけではダメ、ときめきのある街を作るべき、市民と触れ合って別府の歴史と文化を４年間で実感してほしい、との声があった。ただ、司会者が福祉タウンづくりについて議論を進めようとしたが、時間的に言及することができず残念であった。

２、カジノには否定的

カジノについての議論では、大半が否定的であった。その理由は主に２つ。１つは、風紀的に良くないので、子どもの教育に悪影響が出る。そうすれば、別府には小さな子どもを持つ家庭は住ま

なくなるのではないかという意見が学生から多く出された。２つ目の理由は、カジノができたとしても別府で成功するのか。大半が、東京や沖縄などに行くのではないか、とその成功を疑う声も結構多い。

３、議員と市民の交流

市民と議員が交流する機関を作るのは難しい。もしそのような機関ができるのならもう議会はいらないのでは、と市民から厳しい意見が出された。それに対し、出席した議員のひとりは、議員は32名いるが、それぞれが異なった考えを持ち、全体として動くことの難しさを強調。結局、議論の中では名案は出なかった。

全体として、時間的に限られ、議論がなかなか深まらなかったという印象である。ただ、こうした試みを重ねていくことがまちづくりでは最も大切なことかもしれない。

指導教官としての感想

昨年度に引き続き、今年度も「中心市街地活性化」の課題に取り組んだ。第５号でも述べたが、人間関係学科では、地域社会の即戦力を育てようと、学生が地域社会の課題と格闘することを願っている。問題にまずぶっつかって、その問題を共に悩み、解決するために文献を探し調査を行う人間を育ててみたい。１年生をまず社会に叩き込む、そのような気持ちでこの「地域社会学」に取り組んでいる。「地域社会がキャンパス」これがモットーである。本学科の学生は純朴でまじめな人間が多い。別の見方をすれば、少し消極的である。しかし、この１年でかなり逞しくなった気がする。指導教官の贔屓目だろうか。

しかし、竹瓦倶楽部の人々に鍛えられ、発表もかなり堂々としてきた。福祉問題に取り組んだ学生は、身体障害者の自立支援に取り組む米倉さんや大林さんに大きな影響を受けている。韓国からの留学生は日本人学生と共に「ユカタdeピンポン」に興じた。街中で触れ合った思い出はきっと将来大きく花開くだろう。地方政治家である市議会議員に接した学生の印象は強烈であったようだ。でも、基礎自治体の住民代表の問題を身近な問題として考えてほしいと地方自治の研究者としては切に願っている。ともあれ、「地域社会」に潜む人間を育てる力は目を見張るものがある。教育者という立場では、自己否定にも繋がりかねない告白であるが、とにかく、地域の人々におんぶに抱っこの１年間であった気がする。関係者の皆様に心から感謝したい。来年度は、再び「別府の中心市街地の活性化」に取り組む予定である。市民の皆様のご指導をまたお願いしたい。